

脳神経センター 内科部門（神経内科）

1. スタッフ（平成27年4月1日現在）

科 長（教 授）：松浦 徹
 外来医長（教 授）：松浦 徹
 病棟医長（講 師）：嶋崎 晴雄
 医 員（特命教授）：村松 慎一（兼務）
 （講 師）：森田 光哉（兼務）
 （講 師）：小出 玲爾
 （病院助教）：益子 貴史
 （病院助教）：小澤 忠嗣
 （臨床助教）：金 蓮姫

2. 診療科の特徴

神経内科の対象疾患は、脳血管障害、神経感染症、神経変性疾患、神経免疫疾患、神経機能疾患（頭痛、てんかん等）、末梢神経疾患、筋疾患と多岐にわたる。人口の高齢化を反映し、受診患者数は年々増加している。現在、神経内科外来は、毎日3診で、平均約70名が外来受診し、うち約1割が新来患者である。病棟は7階西病棟に30床あり、年間655名（昨年実績）の入院患者を受け入れている。脳血管障害や脳神経感染症、てんかん重積発作といった緊急入院の患者が7割前後であり、地域医療の拠点病院としての役割を担っている。

・施設認定

日本内科学会認定医制度教育病院
 日本神経学会教育施設
 日本脳卒中学会認定研修教育病院

・学会専門医

日本神経学会認定専門医：松浦 徹 他5名
 日本内科学会認定専門医：松浦 徹
 日本東洋医学会漢方専門医：村松 慎一
 日本人類遺伝学会専門医：松浦 徹 他2名
 日本リハビリテーション医学会専門医：森田 光哉

3. 診療実績

3-1) 新来患者数・再来患者数・紹介率

外来新来患者数	1,103人
再来患者数	16,647人
紹介率	79.8%

3-2) 入院患者総数：655人

1) 脳脊髄血管障害：	261例
2) 神経感染症（脳炎・髄膜炎など）、脳症：	32例
3) 神経変性疾患：	133例

筋萎縮性側索硬化症	72例
パーキンソン関連疾患	33例
脊髄小脳変性症	19例
認知症	12例

4) 免疫関連性中枢神経疾患（MS、脊髄炎など）：	68例
5) 代謝・中毒性疾患：	4例
6) 腫瘍性疾患：	5例
7) 内科疾患に伴う神経疾患	10例
8) 脊髄疾患	10例
9) 末梢神経疾患（GBS、CIDP、CMTなど）	34例
10) 筋疾患：	18例
11) てんかん	45例
12) 機能性疾患：	6例
13) その他：	34例

3-3) 手術症例病名別件数

胸腺摘除術：	4例
内視鏡的胃瘻造設術：	17例
気管切開術：	10例
外減圧術：	4例

3-4) 治療成績

脳梗塞rt-PA静注療法：2014年1-12月	16例
パーキンソン病深部電気刺激術：	1例

3-5) 合併症例

なし

3-6) 死亡症例・死因・剖検数・剖検率

<死亡退院症例診断名>

脳脊髄血管障害：	14例
感染症・炎症性疾患：	1例
運動ニューロン疾患：	4例
その他：	5例

計：24例

<剖検症例診断名>

脳幹梗塞：	1例
Alexander病：	1例
MELAS：	1例

計：3例

<剖検率>

12.5%

3-7) 主な検査・処置・治療件数

電気生理検査

末梢神経伝導検査：	300件
同芯針筋電図：	150件

生検

筋生検：	9例
神経生検：	0例
脳生検：	2例

カンファランス症例

診療科内の症例検討会（2014年）

- 1) 4月30日：中枢神経限局性血管炎
- 2) 11月12日：NMDA受容体脳炎の治療
- 3) 12月24日：自己免疫性脳症

他科のカンファランス

なし

モーニングカンファランス 年11回

4. 事業計画、来年の目標等**1) 脳血管障害**

脳卒中自体は、社会の啓蒙活動によりかなり一般住民の理解が進んだと思われ、発症早期に搬送されてくる例が増えている。入院患者の半数弱が脳卒中（ほぼ脳梗塞）であることから、更なる急性期治療の充実が望まれる。また、血管内治療の早期介入等が可能になりつつある現在、当院でもこういった最先端の治療ができるようにする必要がある。さらに、急性期治療を終了した後の患者の転院が円滑に進むよう、各部署との連携を強めて行きたい。

2) 神経変性疾患

パーキンソン病、認知症、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症などについて、最先端の検査治療法の導入、およびそれらの開発に努めてゆきたい。